雷下遺跡から出土した縄文時代早期人骨の予察的検討結果

澤　田　純　明（聖マリアンナ医科大学解剖学講座）

2013年に実施された雷下遺跡の発掘調査において、縄文時代早期に帰属する13点の散乱人骨が出土した（本誌Ｐ２第２図参照）。ここでは、出土人骨の残存状態、年齢・性別、および形態学的観察結果について予察的に略述する。各人骨資料は、グリッドと遺物番号に従って「グリッド番号・遺物番号」と表示し、出土層位を付記した。年齢段階の区分として「壮年」・「熟年」・「成人」の術語を用いたが、これらはそれぞれ「20～40歳」・「40～60歳」・「20歳以上」に相当するものとする。現在、形質人類学的検討を進めており、いずれ改めて詳細な所見を報告したい。

（１）「6D-06・人骨-1」（第５・６貝層の間層、１号人骨）：左右の頭頂骨

残存部位：ほぼ完全な右頭頂骨と、左頭頂骨の下半小片（側頭線から鱗縁までの部分）が残存する。

年齢・性別：大きさから成人と判断されるが、縫合が閉塞しておらず壮年ないし熟年前半と推定される。性別は不明。

形態学的特徴：左右の頭頂骨は接合しないが、大きさと形状から同一個体とみなして大過ない。側頭線の発達は弱い。多孔性の骨変化（cribra cranii）などの病変は認められない。

（２）「7D-07・人骨-２」（第２貝層直上、２号人骨）：下顎骨

残存部位：左右の下顎枝の上半と前歯部の一部を欠損するが、他の骨体は良好に保存される。ほとんどの歯が死後脱落し、左第2および第3大臼歯のみが植立して残存する。

年齢・性別：歯の咬耗状態からみて壮年後半ないし熟年前半と推定される。性別は不明。

形態学的特徴：第2大臼歯は咬耗が進んでおり、咬合面の全体で象牙質が露出する。第3大臼歯では咬合面のエナメル質が咬耗により平坦な面を呈するものの、象牙質の露出には至っていない。下顎角の筋付着部の発達は弱い。齲蝕・歯周炎・抜歯の痕跡は認められない。

（３）「6D-27・７」（第1貝層、３号人骨）：左大腿骨

残存部位：大腿骨頭と骨幹の大部分が残存するが、骨頸と大転子および内・外側顆を欠損する。

年齢・性別：骨体の大きさから成人と推定される。全体的に華奢であり、女性的な印象を受ける。

形態学的特徴：粗線や殿筋粗面などの筋付着部の発達は弱い。骨膜炎などの病変は認められない。

（４）「6E-61・１」（第２貝層、４号人骨）：左上腕骨

残存部位：骨幹の大部分が残存するが、両骨端を欠損する。

年齢・性別：骨体の大きさから成人と推定される。性別は不明。

形態学的特徴：三角筋粗面の発達は弱く、全体的に華奢である。肘頭窩に滑車上孔は開存しない。

（５）「6D-02・１」（第１貝層上表部）：左尺骨

残存部位：骨幹の下半部。

年齢・性別：骨体の大きさから成人と推定される。性別は不明。

形態学的特徴：筋付着部の発達は弱く、華奢である。骨膜炎などの病変は見受けられない。

（６）「6D-45・１」（第１貝層）：右脛骨

残存部位：骨幹の中央部。

年齢・性別：骨体の大きさから成人と推定される。筋付着部が発達しており、男性的である。

形態学的特徴：骨体は頑丈で、ヒラメ筋線の凹凸が著しい。骨体後面の中央が後方に張り出すため、骨幹の断面形は前後に長い菱形となり、いわゆる扁平脛骨の様相を呈する。骨体表面に軽度の骨膜反応が認められる。

（7）「6E-40・1」（第2貝層直下）：右側頭骨

残存部位：鱗部・頬骨突起基部・外耳道・乳様突起が残存するが、錐体の大部分を欠損する。

年齢・性別：大きさから成人と推定される。乳様突起が小さく、女性的である。

形態学的特徴：乳様突起は全体的に小さく、鉛直方向に突出する。外耳道骨腫は認められない。

（8）「6E-50・6」（第5貝層）：左大腿骨

残存部位：骨幹の下半部。

年齢・性別：骨体の大きさから成人と推定される。性別は不明。

形態学的特徴：粗線を中心に骨体の後面が突出して稜を形成し、骨幹の断面形は前後に長いイチジク型を呈するが、粗線自体の発達は強くなく、いわゆる柱状大腿骨とはやや異なる。骨膜炎などの病変は認められない。

（9）「7D-49・9」（砂礫層1（下）（第5貝層相当））：頭頂骨小片

左右不明頭頂骨の鱗縁近くの小片。

（10）「7D-49・10」（砂礫層1（下）（第5貝層相当））：頭蓋冠小片？

ヒトの頭蓋冠小片に類似する。

（11）「5D-99・5」（出土層位不明）：頭蓋冠小片

頭蓋冠の小片だが、詳細な部位は不明。

（12）「6D-26・11」（第1貝層）：右脛骨

残存部位：骨幹の中央部。

年齢・性別：骨体の大きさから成人と推定される。「6D-45・1」の右脛骨とは別個体で、これより華奢であり、女性的な印象を受ける。

形態学的特徴：骨体は華奢で、ヒラメ筋線の発達は弱い。骨幹の断面形は三角形を呈する。

（13）「7D-06・19」（砂礫層2'、第3貝層直下相当）：下顎骨

残存部位：左側の下顎体の臼歯部から左下顎枝の下半前部にかけて残存する。小臼歯2本と大臼歯3本が植立して残存する。

年齢・性別：歯の咬耗状態からみて壮年と推定される。性別は不明。

形態学的特徴：咬耗は強くなく、小臼歯および第1・2大臼歯の咬頭で象牙質が露出するが、その面積は小さい。第3大臼歯でエナメル質がやや摩耗しているものの、象牙質の露出には至っていない。齲蝕・歯周炎・抜歯の痕跡は認められない。

まとめ

頭頂骨、側頭骨、下顎骨、上腕骨、尺骨、左大腿骨、脛骨など13点の縄文時代早期人骨が散乱状態で出土した。いずれも成人ないしそれに近い段階と推定されたが、相互関係は不明。下顎骨と右脛骨がそれぞれ重複することから、複数個体が含まれると判断される。四肢長骨は、小さく華奢なものと、筋付着部が著しく発達した頑丈なものがあり、性差もしくは個体間の多様性がうかがわれる。右脛骨1点に軽度の骨膜反応がみられたが、その他に傷病変や齲蝕は認められなかった。